学校便り　第１１号　　坂城町立坂城中学校

自分を好きになる

発行日　２０１９年１０月１１日

第５３回　新たな大峰祭　閉幕

「創造」をコンセプトにした今年度の大峰祭。生徒会を中心に、様々な「ピース」が集結し、令和のスタートを飾る大峰祭になりました。

今年度もPTA合唱、PTAバザー、豪雨災害への募金等、様々な面で保護者の皆様にはご協力いただき、誠にありがとうございました。

３年美術班とステージバック

令和元年大峰祭開祭式講話

「坂中生よ　大志を抱け」カリヨン讃歌復活

今年は、「令和」元年。新しい時代の幕開けによせて、生徒会でもスローガンを「創造～新たな伝統を～」と決めだし、取り組んでくれています。

昔から「不易と流行」といわれるように、時代の変化に合わせて変革し、創造していくことは必要不可欠です。しかし、一方、変えてはならない「不易」の事柄があります。それは、坂城中にかける先人の思いです。

坂城中は坂城町唯一の中学校、昭和37年開校以来57年、多くの卒業生が本校で学び、社会に巣立っていきました。どの時代でも、地域の方々は坂中生の健全な成長を願い、応援してくれています。私も、今年は、一貫して君たちに「大志を抱け」とお願いしています。坂中生に対する地域の方々の期待、願いを受け止め、我々は、大きな志を抱き、新しい時代にふさわしい坂城中学校を創造していかなければなりません。

さて、坂中の昇降口にある「カリヨンの鐘」は、平成5年、新校舎建設に伴い、坂中の象徴として設置されました。それと同時に、「カリヨン讃歌」も作られました。新校舎竣工式の平成5年の時、この「カリヨン讃歌」を全校で合唱したという記録も残っています。作詞は犬飼康雄先生、平成5年新校舎改築の時の坂城中学校第10代の校長先生。作曲はその先代、第9代校長の平林尚志先生です。二人の校長先生で新しい坂中の未来の繁栄を願って作ってくれたものです。歌の額は1階多目的に掲げられています。しかし、近年、「カリヨン賛歌」を聞いたことがない、ましてや歌ったこともありませんでした。

「カリヨンの鐘」は、一昨年の大峰祭に復活させ、今でも朝、昼、夕の3回時を告げています。

令和になって初めての大峰祭では、「カリヨン讃歌」を復活させようと、生徒会が取り組んでくれました。この大峰祭をきっかけとして、今後も歌い継がれることにより、坂中を作り上げてきた先人の心に思いをはせ、過去から未来に向けて坂中の伝統を創造して欲しいと思います。

今年の大峰祭テーマは「ピース」。全校の人数分のピースを組み合わせ、全校に笑顔があふれ、全員が幸せになる大峰祭を作り上げることにより、新しい坂中を創造し、君たち一人一人が「大志を抱く」大峰祭になることを期待しています。

圧巻の３学年合唱

ピースの集結！

ノリノリの吹奏楽部

体育祭　気迫あふれる綱引き

技術班のロボット

調理班のお弁当

魅惑のライト　１年総合

軽やかなステップ　３年総合

２年総合

成長の振り返り

英語スピーチ

人権作文

大峰祭閉祭式挨拶

令和最初の大峰祭～新しいストーリーが始まる～

木曜日の体育祭で始まった今年の第53回大峰祭の幕が降りようとしています。令和初の大峰祭は、皆さんの当日の活躍のみならず、今まで皆さんが大峰祭に向けて、準備、取り組みをしてきた成果が全て発揮された、すばらしい大峰祭となりました。

今年の生徒会スローガンは「創造」～新たな伝統を～です。大峰祭に向けての準備も「創造」のテーマを踏まえ、大峰祭テーマを「ピース」と据え、全校の笑顔、一人一人が主役、創りあげるという願いを込め、各クラス、各委員会、そして全校の生徒が取り組み、一人一人がお客さんではなく、全員が主役の大峰祭となりました。

「伝統」とは、毎年同じことを変えずに行うことではありません。先輩の想いを踏まえ、時代に応じて、工夫し、進化させてこそ、坂城中の伝統になっていくのです。

新しい令和の時代にふさわしく、開祭式で３年生が「カリヨン讃歌」を復活させ、１・２年生に披露してくれました。

きっとこの成果は、未来の後輩たちにつながり、受け継がれていくことでしょう。

この時代の節目に今年の皆さんが作り上げた大峰祭は、新たなストーリーが始まる大峰祭となりました。それは安室奈美恵さんの歌詞にあるように、「守るものがあるから　強くなれる」「守るものがあるから　信じていける」からです。

人は、分かった喜び、できた喜び、認められた喜びから自信を持ち、自分を好きになり、そして次への意欲を生みだします。今年の大峰祭で、皆さん一人一人が、自分を好きになれた大峰祭であったと感じてもらえたら、最高です。

生徒会役員の皆さん、最上級生の３年生の皆さん、そして全校の皆さんの取組に感謝して、学校長の話といたします。そしてこれからも全校一丸となって坂中を「創造」していきましょう。全校の皆さん、感動をありがとう。